

卓球のまち「池田」



ぜひご参加ください

卓球講習会

なるほど！

卓球講習会

とき 9月24日(日)午前9時30分～11時30分
ところ 五月丘小学校体育館
指導 元全中国大会(20歳以下)の部)優勝者・劉彬さん
持ち物 上靴など
問い合わせ 市民体育課 (☎761・5137)

卓球指導者(養成)講習会

とき 9月24日(日)午後1時30分～4時
ところ 総合スポーツセンター
内容 技術指導や卓球ルール説明など
対象 学校や卓球クラブなどで指導している方
講師 元全中国大会(20歳以下の部)優勝者・劉彬さん
持ち物 卓球用具、上履き、運動のできる服装で
申し込み 市民体育課 (☎761・5137)

いざというときに...

「洪水ハザードマップ」

平成16年10月に全戸配布した「洪水ハザードマップ」は、本市を流れる猪名川や箕面川などが、大雨ではん濫した場合の浸水予想に基づいて作成したものです。浸水範囲や水深、各地区の避難場所などを掲載しています。また、裏面は「池田市防災マップ」で、災害時に避難救護活動を行う施設や災害危険個所などを掲載しています。台風シーズンに入りました。いざというとき、皆さんが安全に避難できるように日ごろから避難場所などを確認し、分かりやすい場所に保管してください。

問い合わせ＝危機管理課 (☎754・6263)



みんな頑張りました

市民総合体育大会結果

◎バドミントン(4月6日)

ジュニア女子 シングルスA 優勝 石谷茉衣(石中)、準優勝 平林桃子(洪中)、3位 橋本美里(細中)、伊藤摩衣(北中)、シングルスB 優勝 榮口華音(IHP)、準優勝 堂本奈穂(池中)、3位 石塚香奈(洪中)、上田彩加(同)

一般女子 シングルスA 優勝 榮口優歌(IHP)、準優勝 新木美香子(ドリム)、3位 新幸奈津美(北中)、小山知子(池田ク)、シングルスB 優勝 清田裕美(洪高)、準優勝 川村絵美(園芸高)、3位 内藤季里(北豊島ク)、杉原規子(同)、シングルスC 優勝 長濱美雪(ラリー)、準優勝 齊藤伸子(北豊島ク)、3位 安藤房子(同)、櫻井恵(池北高)

一般男子 シングルスA 優勝 仲田真基(池田ク)、準優勝 上田英明(同)、3位 奥畑智(同)、瀬口佳孝(同)、シングルスB 優勝 池島祐哉(北豊島ク)、準優勝 高岡一浩(グリーンメイト)、3位 熊谷翔(北豊島ク)、木村光(月曜ク)

問い合わせ 市民体育課 (☎761・5137)

五月山体育館10周年記念ゲーム



チケット発売中

日本初のプロバスケットボールリーグとして昨年スタートした「bjリーグ」。その初代チャンピオン「大阪エヴェッサ」が、「富山グラウジーズ」とプレシーズンマッチで激突。

とき＝10月15日(日)午後1時。試合開始は2時
ところ＝五月山体育館
前売り自由席＝大人 2,000円、中・高校生 1,000円、小学生 500円
問い合わせ＝同館 (☎754・3336)

※駐車台数に限りがありますので、当日は公共交通機関をご利用ください。



「湯山三吟百韻 (写本)」大阪天満宮蔵

歴史民俗資料館特別展

池田氏と 牡丹花肖柏

第一回

前回、応仁の乱をきっかけに起こった権力構造の変化と当時の池田氏の文化、それにかかわった連歌師・牡丹花肖柏について述べました。これに続いて今回は、連歌と連歌師について紹介します。

連歌とは

連歌は、中世後期には和歌をしのぐ勢いで流行した詩歌の一つで、天皇、将軍、公家から庶民に至るまで、

身分の上下を問わず楽しんでいられていました。

その流行ぶりは、当時のさまざまな資料からもうかがえます。例えば、狂言『箕被』には、連歌に熱中するあまり妻に愛想を尽かされ、家を出て行かれそうになる夫が登場します。また、御伽草子『猿の草子』には猿たちが宴席で連歌を行って、婿をもてなす様子が描かれています。

連歌は、古代に和歌の上の句（五・七・五、長句）と下の句（七・七、短句）を二人で詠み合う短連歌という形式から始まりました。院政期ごろには、多人数もしくは一人が、上の句と下の句を一定の法則に基づいて、詠み続ける長連歌という形式が生まれました。その後、数人で集まり創作するのが主流となり、その集まりを連歌会と呼ぶようになりました。

連歌師とは

連歌の特色は、参加者が即興で句を詠むということ、また、次々と詠み続けてお互いの句を鑑賞していく間に、グループ内の連帯感を高めていくということにあります。

即興で言葉を駆使して連歌作品を創作していくのですが、そこには現在の連想ゲームやしり取り遊びの要素が含まれているといえます。連歌は、その場にいた人たちがまさにゲーム感覚で、共同して一つの作品を創作する、世界でも類例のない形式

といえるでしょう。

ただ、いくら即興とはいえ、一定の式目（法則）に従わねばならず、その式目も時とともに次第に複雑になりました。そのため、連歌会の最中に、式目から句が外れていないか、鑑賞に堪えうる内容が連続しているかを調整する必要が生じました。それを専門的に行ったのが連歌師と呼ばれた人たちです。

連歌師は、連歌会に詠み手として参加したり、会全体を統括する調整役として、参加者が出した句を詠み上げ、式目に適しているかどうかを確かめるといった役割を担っていました。また、庶民出身者が多く、連歌師であること以外は詳細が知られていない人がほとんどです。

旅する連歌師

連歌師は、一種の職業となるのですが、それが定着するのは応仁の乱前後であったといわれています。この時期を代表する連歌師として、牡丹花肖柏の師匠である飯尾宗祇（1421〜1502）が挙げられます。出身地には諸説あり、当初庶民層の連歌会で活躍しましたが、次第に実績が認められて、公家の連歌会にも顔を出すようになりました。そして、長享2年（1488）に北野社（現



飯尾宗祇像 良勝筆 近衛家熙賛（京都大学総合博物館蔵）

北野天満宮に置かれた連歌会所の奉行職を命ぜられ、明応4年（1495）に編集者として準勅撰の連歌撰集『新撰菟玖波集』を完成させました。

一方で、宗祇は地方の国人や守護代のもとを訪ねて、連歌会に参加することで経済的な援助を受けています。他の連歌師の中には、地方の守護などを後援者に持ち、地方と都とを何度も移動している人もいました。連歌師は、中央で一級の地位と実力を確立し、その権威をもとに地方でさまざまな恩恵にあずかっていたといえます。

ところで、今回の特別展で取り上げる牡丹花肖柏は、大臣家のひとつ中院家の出身であり、出自の点ではほかの連歌師と一線を画します。ただ、国人・池田氏の庇護を受けたり、新たな庇護を求め76歳で堺に移り住んでいる点では、肖柏も他の連歌師と同様といえます。

問い合わせは歴史民俗資料館（☎751・3019）